

AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD

国際耕種株式会社

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

TEL/FAX: 042-725-6250 Email: aai@sk9.so-net.ne.jp

一坪農園が教えてくれるもの。

今日は、待ちに待った秋の嬉しい収穫の日。見て下さい！落花生(この日は落花生の大収穫！)の株を手にした満面の笑顔！収穫の喜びは、途上国・先進国、そして子供・大人問わず世界万人に共通のもの。そして、東京の住宅街の真ん中のママゴト遊び？のようなこんな小さな畑でさえもその喜びは十分に味わえるのだ。我が社は近所に市民農園を借りていて、事務所からそこへは自転車です約 15 分という距離である。畑の広さは 30 m²で、実際は坪数に換算すると 9.09 坪あるのだが、我々はその小ささに敬意を表し？愛しさを込めて？“一坪農園”と呼んでいる。どうして会社で農園を借りているのか。自給自足？違う。野菜を売って会社の売上に貢献？まさか！つまり・・・我々は、土と関わる仕事をしながらも、会社自身が会社として実際に年間を通して畑仕事などの土いじりができる現場を持つ機会に乏しい。果たしてそれで農業コンサルタントといえるのか？机上の仕事が全てではなからう？という思いが一つめ。生きていくための食を自ら生産することの実践=小規模ながら年間を通して野菜・穀物を作ることの意義・手間・大切さを忘れない、というのが二つめ。そして遂には、会社としてひとつ現場(=ここでは市民農園)をもつことで、現場を通して色々なことを試してみたり、考えてみたりすることができるのではないかというのが三つめ。以上のようなことを以前から常々感じていたが、「まず実際に手を動かそうよ。」という一言からこの市民農園との関わりが始まったのである。



『不耕起・無農薬・有機栽培で生物学的多様性を目指す』が最初のコンセプト。粗放栽培=パーマカルチャーもどき？の実践をいきなり試みた。というか、毎日手をかけることの出来ない諸事情もあり手抜き管理ということになったのだ。ここで言う手抜きとは、雑草を抜かず地上部の茎葉のみを適宜刈り払うというもので、これは緑被率を高め、土壌流失を防ぎ、虫を呼び込むためのもの。“バイオポア”という言葉をご存知だろうか。ミミズなどの土壌動物によってつくられる穴や植物の根の枯死・分解後に残される穴のように、生物によって形成される細長い管状のものをバイオポアと言う。そしてそれは、不耕起栽培をしていけば壊されることなく、耕起する機械の刃が届かないさらに下層にまで長く連続したものを形成する。それは、土中の通気排水性を高め、新たな根が深く旺盛に伸長することを助けるといった優れた役割を果たすらしいのだ。しかし、最初からこの粗放管理&混植栽培は無謀な試みであった。わずか 30・足らずの土いじりといって馬鹿にしてはいけない。湿潤温暖気候のこの日本に於いて春から梅雨、夏を越して秋までの期間は、雑草との戦いである。加えて、接する隣の畑を常に気にしながら。湿潤温暖・肥料&水あり・良質の畑土という好条件は揃っている。あわよくば夏の果菜の収穫を・・・の期待は打ち砕かれた。ソルガム、オクラ、ササゲ、インゲン、落花生を除くトマト、ナス、ズッキーニ、カボチャ、ソバ、トウモロコシ等は散々な結果に終わった。植物は、正直である。十分な土作りができていない畑に収穫が見込めるわけがないのは当然である。ただ、他の畑と比較して緑被率の高いこと、虫が多いことは胸を張れたが、ひたすら慌ただしい除草と防虫作業に追われたのだった。

たった一坪の農園から、穀物の輸出入に減反、日本の自給率、食の西洋化、有機農業とその現実、途上国と世界の日本・・・と果てしなく思考は広がっていく。この6ヶ月間、畑は



我々に何を教えてくれたのか。畑作業から何を学び、何が言えるのか。そして、それをどう活かし、発信するのか。「そんな大袈裟な・・・」と言われるかもしれないが、この一坪農園、我々にとって意味深い 9.09 坪なのである。この畑で我々は、単に“野菜”を収穫するだけでなく、“何か”を収穫しようとしている。でも実のところは、そんなことより何より、事務所での机上の仕事より畑で土いじりしている方が楽しいからだったりして？さて、次なる嬉しい冬の収穫とバイオポアの実証の程はいかに・・・ (10月上旬 小島冬樹)